

東区の姫街道



姫街道の市野宿は、東海道にも勝負も出来なかった。その証拠に、市野宿には本陣・脇本陣が置かれていた。

市野宿(昔の街並み) 6

江戸時代、東海道の脇往還として旅人が行き交った姫街道には市野、気賀、三ヶ日、萬山の四宿があり、市野宿には本陣・脇本陣が置かれていました。

町内の旧家齊藤家には古文書や高札などが残り、街道の昔ながらの情緒を感じさせる家並みが続いています。

資源解説板

市野宿 市野宿は江戸時代中頃まで大谷や旗本の往来も多く、本家連の御邸の御所跡として受けた。宿の名は東国「市野」(新丁)の「野」の字を取る。東西の地形区画が現れ、現在も西側の地形が現れている。市野宿には本陣・脇本陣が置かれていた。

街道沿いにある地域資源の説明用に設置しました。

安養寺(大マキの木) 7

高さ18m、幹周2mにもなる力強い樹形がひときわ目を引くこのマキは、昭和62年(1987年)10月15日浜松市の保存樹(保存樹第36号)に指定されました。マキは、マキ科マキ属の常緑針葉木で、高さは20m程にもなります。雌雄異株で樹皮は白っぽい褐色、莖は真っ直ぐに伸びます。風に強いマキは、庭木や防風林として重宝されています。

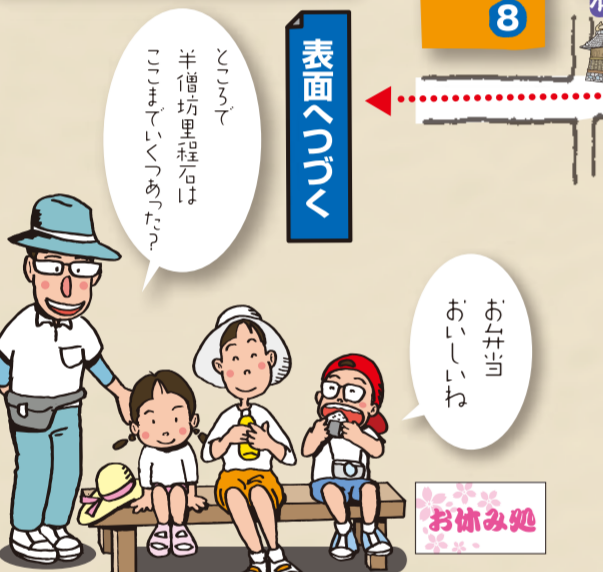
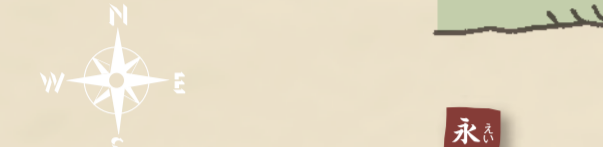
安間川公園

東区安新町に位置し浜松環状線(浜松インター取り付け道路)と安間川に接する地区公園です。市道を活かした野球場、自由広場、テニスコート(ハードコート)ゲートボール場、幼児用簡易遊具があり、南側にはテニスコート(クレーコート)、芝生広場、蛸型遊具、ブランコ等があります。

■駐車場(公園内48台)無料。公園北側エリアに40台、南側エリアに8台。(ご利用時間 9時~21時)

了願公園

東区安新町にある公園です。旧安間村を開拓した「安間了願」から名づけられました。ゲートボール場(多目的広場)とロッキング遊具があります。



- 神社
- 寺
- 史跡
- 碑
- 給食案内板
- 資源解説板
- お休み処
- 公園
- 駐車場
- トイレ
- 交番
- 郵便局
- コンビニ
- 道標
- 半僧坊里程碑



大歳神社

おとしじんしゃ

天神宮大歳神社は疫病除けの神様として近隣の信仰を集めていました。花火の起源については幕末、浜松城主井上河内守より尺筒を拝領し、尺玉の花火を打ち上げたのに始ると伝えられています。「厄病除けと花火の天王さま」として知られ、歴史は平安時代にさかのぼります。(8月第1土・日曜日の大祭には数百発の花火が打ち上げられています。)

げんべいの石神様 4

昔むかし、姫街道を旅していた大変高貴な方が、京へ向かう途中この地で病気で亡くなりました。悲しんだお供の者は地蔵尊を建てねんごろに供養しました。しかし、天竜川の河原だったので度重なる洪水でお地蔵さまは川底に沈んでしまいました。

江戸時代ごろ、この近くを流れていた「げんべい川」と呼ぶ川で洗濯したり、汚れ物を流していました。すると、怪我や病気の人が続出しました。川の中から石神様を拾いあげて丁寧に祀りすると災難もなくなると伝えられています。

報徳記念碑 3

ほうとくきねんひ

二宮尊徳が提唱する勤労、勤勉、生活改善を教える報徳運動があり、下石田村の神谷与平治森之は、弘化4年(1847年)に「下石田報徳社」を設立。多くの農事改良や生活指導、報徳精神を与平治の村々にも報徳運動は大きな影響を与えて結社する村が相次ぎ、明治8年(1875年)、「遠江国報徳社」結社創設となりました。

芭蕉の句碑(庚申堂) 5

ばしやう くひ こうしんどう

天保15年(1844年)ころに下石田の俳人小池吉心などによって建立されたものと推測されています。句は芭蕉の「笈の小文」に所収されているもので、大和丹波市付近で詠んだもので、高さ約1メートルの天竜自然石に刻まれています。

茅取て 宿かるところや 藤の花 芭蕉

本坂通安間起点と安間一里塚 1

東海道を明善生家から50mほど西に進むと、本坂通(姫街道)の起点があります。起点付近は、道幅が狭いまま残されています。この分岐点には道標があり、姫街道が鳳来寺道でもあったことを示しています。この道標は現在は150m西にある天竜協働センターの敷地に移されています。安間起点の西には、江戸から64番目の東海道安間一里塚が東海道の両脇にあり、この一里塚は姫街道の一里塚も兼ねていましたが、現存していません。

普傳院(千体堂) 2

ふでんいん せんたいどう

戦国時代、天竜川沿いの戦いで討ち死にした徳川、武田双方の将兵を供養するため、村人の浄財で千体の木彫像を安置した千体堂を姫街道沿いに建立したと伝えられています。現在、その千体堂は普傳院に移築され、安置されています。

東区と通る姫街道は、安間の起点から、最古の道標まで約6kmほど続きます。当時の旅人たちが道に迷わずに、この道標が、おかげさまで。

